

I 学校の概要

学力向上モデル校事業 観音寺市立柞田小学校

◆児童生徒数及び教員数

○児童生徒数

第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年	特別支援	全校
3学級 80名	2学級 52名	3学級 73名	3学級 80名	2学級 56名	3学級 76名	6学級 26名	22学級 436名

○教員数 31名

◆学校の特徴

本校では、令和6年11月に開催予定の四国社会科教育研究大会香川大会に向けて、社会科の授業を中心に研究を進めている。本校の教育目標は、「豊かな人間性を培い、自ら進んで取り組む、心身ともに健やかな児童の育成」であり「本気全開！柞田っ子」を合言葉に文武両道の児童の育成を目指している。一昨年度まで道徳教育を核とした研究を積み上げて、日々の授業や活動の中に、道徳教育の視点を盛り込むことで、子どもの自己肯定感を高めることを目指してきた。また、昨年度はこの研究を基盤に、創意・工夫を重ねた、日々の学習を大切に、子どもたちが、毎日の学習や生活において、自分の意志で判断しながら、課題を解決する力が育成することが、「子どもが輝く学習の創造」につながると考え、授業改善に努めている。

II 研究主題等

研究主題

子どもが輝く学びの創造

～ 子どもの思考・表現する場を大切にした授業づくり ～

◆研究主題設定の理由

急速な情報化や、環境問題やエネルギー問題、世界規模で発生する自然災害等、様々な課題が山積している現代社会。まさに予測困難な時代を生きていく子どもたちは、こうした変化に主体的に向き合い、他者と協働して課題を追究して、解決していくことや、その過程を通して、自らの可能性を見つけ、存分に力を発揮し、自分の人生を切り拓いていける力を身につけることが重要であると考え。こうした力の育成に向けては、様々な社会的事象に対して自ら問題意識をもち、仲間と関わりながら思考・判断・表現し、問題解決していく経験を積み上げていく必要がある。

そこで、本年度は、子どもが主体となって創意・工夫を重ねた授業のあり方をめざしていく。これからの時代を生きていく子どもたちにとって必要となる自分の思いや考えを根拠をもって伝え、多様な考えに触れながら、互いの良さを認めあいながら課題解決していく力を育てていきたい。そのために、常の学びから教師主導ではなく、子どもたちが自ら課題意識をもち、主体的に話し合い、自分の意志で判断しながら納得解を見出していくことが重要と考える。こうした授業を「子どもが輝く授業」と考え、目標として定め、実践していくことで、子どもたちは、自らの力で課題を解決できたことに自信をもち、将来、何か困難なことに出合ったとしても、自分の人生をより良い方向に切り開いていくことができると考えた。

◆研究内容及び方法

今年度は、子どもが思考・表現する場を大切にした授業づくりについての研究を行う。研究主題設定の理由でも述べたように、本校の児童は、「思考力・判断力・表現力等」に課題があることが分かった。そこで、「思考力・判断力・表現力等」に重点を置いて、授業改善を進める必要があると考えた。そこで、以下の3つの視点のもとで実践を行った。

【視点1】 解決への追究意欲を高める学習問題（問い）の工夫

授業の入り口を支える導入や問いづくりの工夫は、子どもの興味・関心を高めるために非常に大切である。

問いの質を高めることが子どもの思考力や判断力等を培う前提条件であるとも言える。そこで、本校では「問い」の在り方こそが研究の出発点と考え、視点1を設定することとした。子どもが主体的に課題を追求するためには、課題を自分事として捉えていくことが大切である。そのため、具体性・矛盾性・周縁性をもたせた教材の開発をめざしている。また、子どもの追究意欲を高めるために、教材との出合わせ方を工夫する必要がある。

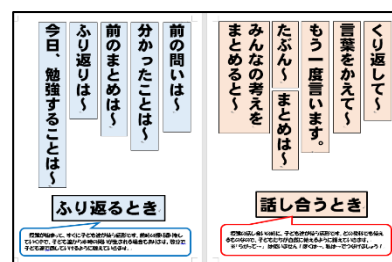
【視点2】学び合い、高め合う話し合いの設定

(1) 深い学びへと繋ぐ協働的な話し合い — 話型・ヒントカードの活用で見方・考え方を身に付ける —

他者と協働して課題解決に取り組むためには、話し合いの際に、しっかりと相手意識をもって話したり聞いたりすることが必要である。本校では、以前から「聞き方」・「話し方」の姿勢について指導してきたが、それに加えて、話型を活用して表現する力をつけていく。話型を活用することは、ただ表現方法を身につけるだけでなく、考え方を身につけることにも繋がる。発達段階に応じて、低学年用と高学年用を作成し、活用している。



【低学年用】



【中・高学年用】

(2) 多面的・多角的に考察し、意思決定する場の設定 — 対話ドリル —

全ての子どもが輝く学びのためには、子どもが自分の考えを自信をもって伝えたり、友だちの意見を聞いて、考えを広めたりすることが重要である。そこで、朝のドリルタイムに「対話ドリル」の時間を設け、自分の意見を根拠をもって伝える力の育成を図った。子どもたちは、同じ資料からでも、多様な見方・考え方ができることに気づき、自分の考えを広めたり、深めたりすることができると実感できた。

【STEP1】読み取る力をつけよう！！

- ① 資料・写真等から分かること・見つけたこと（事実）をワークシートに記入する。
- ② 意見を交流する。
- ③ 今日のキラリ☆と輝く意見を決める。

【STEP2】

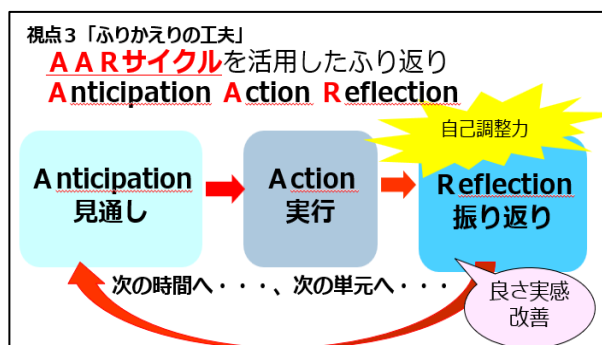
- ① テーマに対する自分の意見を書き、理由も明確にする。
- ② 意見を交流する。
- ③ まとめ・ふり返り

【視点3】ふり返りの工夫

ふり返りで自分自身の学びを客観的に見つめ直すことで、次の学びを深めることができると考える。本年度の研究では、中・高学年ではAARサイクルを活用し、1時間の授業の終末で、まとめや分かったこと、感想を書くだけでなく、1時間(1単元)の中で、何ができるようになったのか、できなかったことは何なのかを自覚できることをめざしてきた。一時間、もしくは一単元の中で、見通しをもち、実行し、自分自身の学び方を振り返ることで、学び方の良さを実感したり、うまくいかなかった場合は改善方法を考えたりして、次の学習でも活用できるようにした。これを繰り返すことで自己調整力が育成され、社会的な見方・考え方を働かせ、資質・能力を育てることをめざした。

このようにAARサイクル(※1)は、メタ認知を促していくサイクルであるが、低学年の段階でメタ認知を促すことは難しい。低学年では、ふり返りで「分かった喜び」「もっと知りたい」など情意面を整理するふり返りを行っている。分かったことや感想、興味をもったことやもっと知りたいこと、などを自分の言葉で表現できる力を育成することで、中学年以降でAARサイクルを活用できる素地を育成している。

このように、自分の学習を客観的に分析し、次への改善方法に目を向けるように意識させることで、自己を客観的にふり返り、改善方法を考え、解決していくという経験を積むことができた。そうすることで、自らの力でより良い方向に進む力を身に付けられるだけでなく、他者と協働的に議論することが課題解決に繋がるという自覚を促すことにもなった。



※1…AARサイクルとは、見通しを持って行動し、自分自身の学び方をふり返り、次の学習でも活用できるようにするサイクルのこと。

III 研究実践

◆指標設定と達成に向けた取組

【視点1】解決への追及意欲を高める学習問題（問い）の工夫

- 1 (児童質問紙) 授業では、学級やグループの中で、自分たちで課題を立て、その解決に向けて情報を集め、話し合いながら整理して発表する活動に取り組んでいますか。

指標2 「①思う+②どちらかといえば思う」の合計



【指標の達成に向けた実践】

(1) 授業の始まりを支える導入の工夫

問い作りは、子どもの興味・関心を高めるために重要である。問いの質を高めることが、子どもの思考力や判断力等を養う上で重要であるとともに、追及意欲を高めるためには、どのように教材と出合わせるかも大切である。そのために、既習事項との共通点や差異点、数値の変化の理由、物事の理由など、本文や資料から生まれた疑問や子どもの解釈や判断のずれから生まれる疑問を大切にしたい問い作りの在り方を探っている。さらに、意図的な資料の提示によって、子どもの問いを引き出すことも導入の工夫の一つであると考えている。例えば、文章や資料を段階的に提示したり、限定的に見せたりすることで、変化を捉えやすくすることができる。問い作りのための資料の提示方法や提示するタイミングは、教科ごとの単元や本時の内容に合わせた最適な方法を見出していくことを心がけている。

(2) 第3学年社会科、「店ではたらく人」の単元の実践

第3学年社会科「店ではたらく人」の実践では、まず、単元の導入で各家庭で買い物調べをして、そのデータをもとにグラフを作成した。

次に、そこから読み取れるスーパーマーケットに行く人が多いという事実から疑問をもち、単元の学習問題「スーパーマーケットで働く人は、たくさんの人に買い物をしてもらうためにどのような工夫をしているのだろう」という学習問題を成立させた。児童は、買い物調べという生活経験をもとに考えたことで「どうして」「しりたい」と自分事として社会的事象を捉え、課題意識をもって主体的に学習に取り組んでいくことができた。

商品の並べ方の工夫について考える時間では、前時までに商品の並べ方は、肉は肉・たれはたれといったように種類別にきれいに、買う人が分かりやすくなるように並べてあると児童は気づき、まとめていった。このように、商品の並べ方について共通理解した後、

「本当に、すべてそうなっているのかな？」と問い返し、肉以外の違う商品が置いてある肉コーナーの写真を提示した。そして、違う商品が置いてある様子を段階的に見せることで既習内容との矛盾に気付かせることができた。この矛盾から、「種類別においてあるはずなのに、なぜちがう商品が置いてあるのだろう」という本時の問いを児童から引き出し、追及意識を高めることができた。



学習問題

スーパーマーケットで働く人は、たくさんの人に買い物をしてもらうためにどのような工夫をしているのだろう？

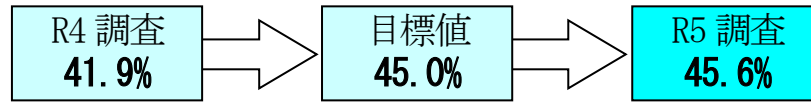


種類別においてあるはずなのに、なぜちがう商品が置いてあるのだろう

【視点2】学び合い、高め合う話し合いの設定

1 (児童質問紙) 学級の友達と話し合う活動を通じて、自分の考えを広げたり、深めたりすることができていますか。

指標4 「①思う」の数値



【指標の達成に向けた実践】

授業の始まりを支える導入の工夫

主体的に話し合い、課題解決する力を育成するためには、授業の中で課題解決に向けて自ら考え、表現したり、多様な考えに触れたりしながら問題解決する経験を積み上げていくことが必要である。そのためには、子ども達が自分の考えを自信をもって伝えたり、友だちの意見を聞いて考えを広げたりする経験を積むことが必要である。そこで、以下の取り組みを行った。

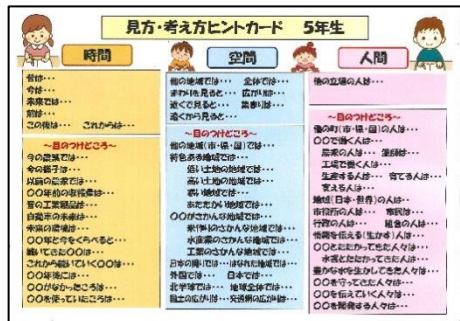
(1)対話ドリル

朝のドリルタイムに、「対話ドリル」を行い、簡潔に、短く、分かりやすく、自分の意見を根拠をもって伝える力を育成した。話形も参考にしながら、自分の思ったことを発表したり、友達の発表からつながりたりすることで、思考の幅や視点を育てた。対話ドリルは、1つの資料をもとに、2週連続で行い、1週目のステップ1では、1つの資料からできるだけ多くの事実を読み取り共有した。その翌週、ステップ2では、その事実を根拠に自分の考えを、理由と共に発表した。互いの考えを聞き合うことで、同じ資料からでも多様な見方・考え方ができることに気づき、自分の考えを広めたり深めたりすることができた。



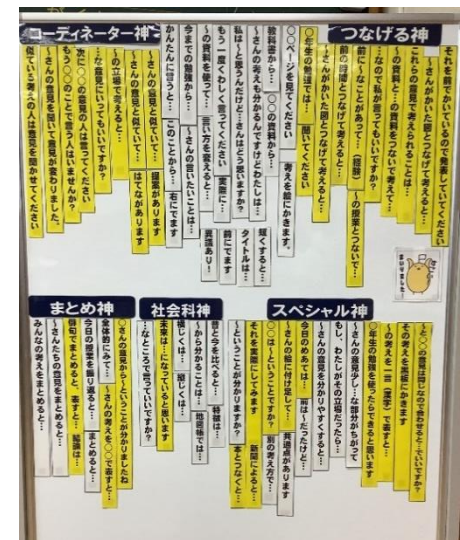
(2)見方・考え方ヒントカード

「見方・考え方」を働かせるには、普段の授業の中で子どもが「考え・表現する」過程を大切にしたい授業づくりを行うことが大切である。社会科の教科書を参考にして、学年ごとに「見方・考え方ヒントカード」を作成し、いつでも取り出して活用できるようにした。



「時間・空間・立場」の3つの視点のもとに、各学年の学習内容に即した例を示すことで、児童は思考のヒントを得ることができ、自分の思いや考えを表現できるようになった。

また、他者と協働して課題解決に取り組むためには、話し合いの際にしっかりと相手意識をもって話したり、聞いたりすることが大切である。話形を活用することは、ただ表現方法を身に付けるだけでなく、思考の方法を身に付けることにもつながる。そこで、「ふり返り」「話し合い」等、場面ごとに分けて話型を作成した。子どもの思考に沿って話型を作成し、活用することで、児童は自然と思考の幅を広げ、教師主導ではなく自分たちだけで話し合いを進めることができるようになった。



さらに、具体的で多様な話し方を話型としてカードで掲示した。話し合いの中で「新しい伝え方で話し合いが楽しかった。」「友だちが使っていた話し方が自分も使えた。」という経験を積むことで、子どもたちは、友達の考えを理解し、お互いの良さを認め合いながら話し合うことの良さ気づくことができた。

◆指標設定と達成に向けた取組み

【視点3】ふり返りの工夫

1 (児童質問紙) 授業の最後に、学習内容を振り返る活動をよく行っていると思いますか。

指標3 「①思う+②どちらかといえば思う」の合計



指標の達成に向けた実践

(1) AARサイクルの活用

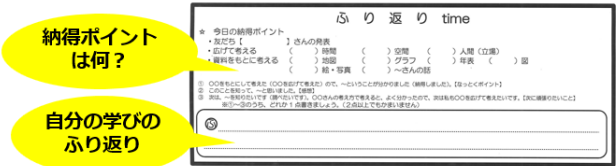
本校では、AARサイクルを活用したふり返りを行っている。AARサイクルを活用したふり返りでは、子どもが自らの学び方をふり返り、成果と課題を客観的に分析することで次の学びにつなげることを目指している。

AARサイクルでは、「見通し」・「実行」・「ふり返り」の3つの段階があり、特にふり返りが重要となる。

そこで、AARサイクルを活用し、メタ認知を促すことを意識させていった。「自分は、どう学び、どのように変容したか。」という学習方法にも目を向け、自分自身を振り返ることで、「調べ方」や「考え方」が深まり、次の学びへと活用できるようになったり、単元を通して考えたり、見通しを持ったりできるようになり、学習意欲を高めることができると考えた。また、友だちの考えや学び方にも目を向けることで、他者と協働的に議論することが、課題解決に繋がるということを実感させることができた。

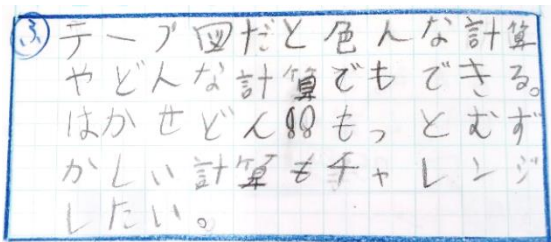
(2) ふり返りの実際

実際のふり返りの際は、右のようなふり返りシートを活用した。このように、自分の学習を客観的に分析し、次への改善方法に目を向けるように意識させることで、自己を客観的にふり返り、改善方法を考え、解決していくという経験を積むことができた。そうすることで、自らの力でより良い方向に進む力を身に付けられるだけでなく、他者と協働的に議論することが課題解決に繋がるという自覚を促すことにもなった。

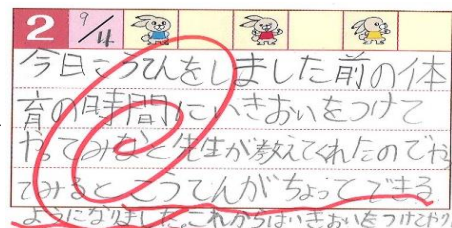


①自分の学習方法を分析 → ②改善方法

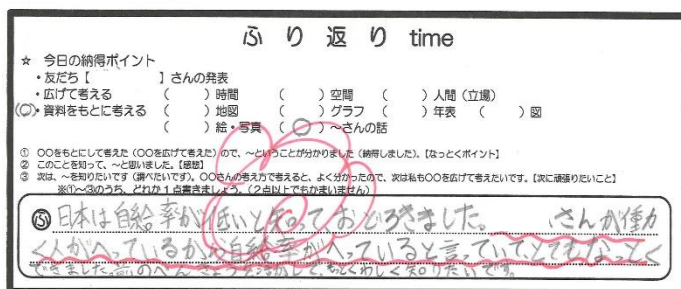
なお、低学年の段階ではメタ認知を促すことは難しいため、「分かったこと」・「もっと知りたいこと」などの情意面を整理するふり返りを繰り返し、AARサイクルを活用したふり返りへの素地育成を図っている。



【2年生算数】
分かったこと+次の目標



【3年生体育】
前時の学習とつなげて+次の目標



【5年生社会科】
友だちの考え(既習事項を生かす)の良さ+次の目標

IV 研究の成果と課題

【成果】

- 普段の授業で話形を活用して話したり、対話ドリルで資料から読み取った事実をもとに自分の考えをつくり出し、表現したりする経験を積み重ねてきた。そうすることで、4月当初と比べて、あまり自分の考えを語れなかった児童が、いきいきと考えを発表するなど自由に考えを出し合い、聴き合い、練り上げていこうとする学習集団が育ってきている。
- 自分自身の学び方を客観的に振り返ることで、問題解決に至る「調べ方」や「考え方」に目を向けることができるようになった。次の時間につながるふり返りを繰り返した結果、自分が問題解決できた理由を探ることで、次の学びへの見通しをもつことにもつながっている。

- 今年度の県学習状況調査質問紙の結果を分析したところ、「授業が楽しい」と感じている児童は86.0%、「授業の内容が分かる」と答えた児童は、73.7%と、県平均を上回っています。また、昨年度の本校の結果と比較しても、どちらの項目も大幅に増加している。これらは、学習問題づくりや話し合いやふり返りを意識して実践を重ねてきた成果と感じる。

授業は楽しいと思いますか	柞田小・・・86.0% 県平均・・・73.1%
授業の内容がどの程度分かりますか	柞田小・・・73.7% 県平均・・・68.5%

令和5年度 香川県学習状況調査

- 岐阜県内の研究発表会に参加し、新領域「どう生きる科」に関する研究について学ばせていただいた。「問題解決力」・「関係構築力」・「貢献する人間性」の育成を目指したものであり、この「どう生きる科」で学んだことが教科の学習に生かされていると感じた。子どもの心情をもとにした問いづくりや、多面的多角的に考察し、対話する授業など本校の研究にも通じるところが多々あり、本校の研究を具体的に見直すことができ、研究を深めることができた。

【課題】

- 話し合い活動を通して、考えを広めたり深めたりすることができる実感している児童は、県平均との大きな差は見られず、今後さらに伸ばしていくべき点だと感じる。今後、さらに子どもが輝く学びを創造するためには、子どもが自ら問題解決に向かうような問いづくりや、教師主導ではなく、子ども達が主体的に対話し協働的に問題解決する経験を積み重ねていくことが必要である。
- そのためには、お互いの意見を聞き合うことの喜びや、自分たちの力で問題解決できたことの達成感を感じるできるように、校内体制のさらなる改善を図り、全職員で共通理解して、全学級で普段の授業の中での取り組みを見直し、工夫していく必要性を感じている。

学級の友だちとの間で話し合う活動を通じて、自分の考えを広げたり、深めたりすることができる。	柞田小・・・82.5% 県平均・・・82.4%
---	----------------------------

令和5年度 香川県学習状況調査